



Title	プラハ言語学サークルにおける機能の概念
Author(s)	大平, 陽一; Ohira, Yoichi
Citation	スラヴ研究, 67, 83-114
Issue Date	2020-07-16
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/84284">https://hdl.handle.net/2115/84284</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	67_04_Ohira_Yoichi.pdf



# プラハ言語学サークルにおける機能の概念

大 平 陽 一

## はじめに

1926年に発足したプラハ言語学サークルは、その言語理論に関する二人の先駆者のうちフェルディナン・ド・ソシュール(1857-1913)から構造の概念を、ヤン・ボードゥアン・ド・クルトネ(1845-1929)から機能の概念を継承したという指摘がしばしばなされてきた。実際、1929年の第1回の国際スラヴィスト会議に提出された「テーゼ」の第1条は、「言語とは機能的なシステムであるとみる考え方」<sup>(1)</sup>と題されており、そこでは「構造」と同義と見なしうる「システム」という名詞を「機能的」という形容語が修飾している。また言語学事典の「プラハ学派」の項目にも次のような記述がある。

機能は構造とともにこの学派にとって二本柱となる概念であるが、言語に機能があるからこそ、それに対応する構造があるので、自ずと機能は構造に先行し、より重要である。したがって、この学派はしばしば、機能構造学派あるいは機能言語学派といわれる<sup>(2)</sup>。

以上のことは今さら特筆するまでもない周知の事実であるが、拙論ではあえてこの「機能」なる概念に再検討を加えようと思う。なぜならプラハ学派は「構造主義的観点と機能主義的観点を受けいれるということに関しては一枚岩だが、共通の原理の応用となると小さからぬ見解の相異が常に存在した」<sup>(3)</sup>とヨゼフ・ヴァヘク(1909-1996)が指摘している通り、機能の概念の使用法にも異同が見いだされるからである。むしろそうした機能観の多様性にこそ彼らの言語学的・記号論的見解の多様性が反映されているはずだが、ヴァヘクの『プラハ学派言語学辞典』<sup>(4)</sup>をはじめとしてプラハ学派についての紹介文や解説文にあっては、その先にある言語論や詩論の前提でしかない——機能的見地に立つ言語論や詩論を論じることの前提でしかない——機能の概念は、全くと言ってよいほど単純化されている。

そうした中、創設メンバーの一人ボフミル・トゥルンカ(1895-1984)やヴァヘクの学統を受け継ぐ言語学者・英語学者フランチシェク・ダネシュ(1919-2015)<sup>(5)</sup>の二編の論考だけは、奇特なことに、プラハ学派の「機能」の概念を一律に定義することの困難を真正面から

1 「第一回スラヴィスト会議提出のテーゼ」(北岡誠司訳、水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』せりか書房、1982年、351頁(以下「テーゼ」と略称))。

2 亀井孝・河野六郎・千野栄一『言語学大事典第6巻：術語編』三省堂、1996年、1153頁。

3 Josef Vachek, *The Linguistic School of Prague* (Bloomington: Indiana University Press, 1966), p.8.

4 Josef Vachek, *Lingvistický slovník Pražské školy* (Prague: Karolinum, 2005).

5 Petr Čermák, Claudio Poeta, and Jan Čermák, *Pražský lingvistický kroužek v dokumentech* (Prague: Academia, 2012), pp. 351, 355, 356.

論じている<sup>(6)</sup>。「機能(的)」という術語をメンバーの著述に見いだすことはたやすく<sup>(7)</sup>、機能を何らかの現象の「課題」「役割」であるとか「言語外現実へのレファレンス」<sup>(8)</sup>といった理解が典型的であるとしながらも、この術語の明確な定義は見だし難い理由の第一に「プラハ学派の著作には『機能』を定義するなり説明するなりせんとを試みが、実はごくわずかしかない」<sup>(9)</sup>ことを挙げているのは、自らの論考についての自負の表れでもあるのだろう。

さらにダネシュは、プラハ学派における機能を定義することが困難な理由として、「研究者ごとに差異と揺れが存在すること」<sup>(10)</sup>を指摘し、初代会長としてプラハ言語学サークルの屋台骨を支えたヴィレム・マテジウス(1922-1945)とロマン・ヤコブソン(1896-1982)——1920年にソビエト外交使節団の一員としてチェコスロヴァキアに至り、マテジウスの知己を得たことによりサークルの創立に参画したヤコブソン——の所説を、プラハ学派における機能観の両極として比較対照している。ダネシュに倣い、小論においてもプラハ言語学サークルを代表する言語学者であるマテジウスとヤコブソンの所説に機能の定義の揺れと多様性を辿ろうと思う。だがその上で、構造主義的民族誌を確立したとされるフォークロア研究者のピョートル・ボガトウイリョフ(1893-1971)とプラハ構造美学の代表者ヤン・ムカジヨフスキー(1891-1975)の機能観も考察の対象に加えようとも思う。言語学の枠を超え、民族誌学、美学、詩学、文学理論の研究者も参加しながら、機能主義という理念を共有していたこともまた、プラハ言語学サークルの大きな特徴なのだから。

ただここで留意しておきたいのは、小論の道案内と頼むダネシュが、プラハ構造言語学における機能の概念にのみ焦点を当て、ボガトウイリョフやムカジヨフスキーらの記号論的研究については全く論じていないことである。しかも、ダネシュはヤコブソンを純然たる言語学者のごとく扱っている。

しかし、マテジウスの場合、英語の語順の研究から機能構文論という新分野を開拓したというように、言語学の分野にその業績が限られていたのに対し、チェコ移住直後のヤコブソンは、むしろロシア・フォルマリズムの中心人物として、プラハ学派の詩的機能論へと繋がっていく詩的言語論でもって知られていたし、数から言えば詩学関係の業績の方が多かった。「言語学と詩学」(1960)において最終的に定式化されたヤコブソンの6機能図式が、実は言語についてのモデルであったにもかかわらず、芸術テキストにも適用可能な万能の図式と見做され、西側では余り知られていなかったムカジヨフスキー美学の機能論を覆い隠すようになったのも、彼のそうした経歴と無関係ではないはずだ。

またヤコブソンという脱領域的な知性は、ニコライ・トゥルベツコイ(1890-1938)とともに構造主義音韻論を確立したという言語学における偉大な業績にもかかわらず、隣接諸科

---

6 František Daneš, “On Prague School Functionalism in Linguistics,” in René Driven and Vilém Fried, eds., *Functionalism in Linguistics* (Amsterdam: John Benjamin Publishing Company, 1987), pp. 3-38; „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,” *Slovo a slovesnost* 69, nos. 1-2 (2008), pp. 9-20.

7 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,” p. 12.

8 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,” p. 13.

9 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,” pp. 12-13.

10 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,” pp. 12-13.

学の理論に過剰なほど敏感に反応し、言語研究の方法論に目的論的観点を導入することを躊躇うことがなかった。こうしたヤコブソンの姿勢も、彼の機能の概念に独特の（ある意味で非言語学的な）「ひねり」を加えることになったのではないか。ダネシュは「プラハ学派：理念的不変項と変異項」において、「この概念は言語やことばの種々の領域と結びついて様々な変容を蒙り、様々な概念上の変異を示す」<sup>(11)</sup>と述べているが、この評言は、ボガトウィリョフの民族誌学やムカジョフスキーの美学における機能の概念はもちろん、ヤコブソンの機能論にも妥当するように思われるのである。

とはいえ、まずはマテジウスとヤコブソンの言語学の仕事の中に両者の言語論における機能の概念の異同を確認することから、この再検討の試みを始めよう。

## 1. マテジウスにおける機能の概念

ダネシュの分類によれば、プラハ学派には機能なる概念の使用法にも次の五つの類型が見いだされるという。

- ①方法論上の原理（マテジウス「機能から伝達と表現の手段へ」、②言語や発話やその両方のもつ外的機能（ビューラー、ヤコブソン）、③言語体系の諸単位がそれぞれのレベルにおいて果たす言語内的機能、④「機能」という術語のさらなる使用例（「機能負担量」であるとか「機能構文論」、⑤言語発達の機能主義的解釈（特に「治癒的言語変化」の概念）<sup>(12)</sup>。

しかし、プラハ学派の機能主義理論の背後には、それ以上に大きな原理的差異が、ヴィレーム・マテジウスとロマン・ヤコブソンの機能主義の間に存在すると、ダネシュは続ける<sup>(13)</sup>。この差異を端的に示しているのが山口巖によるマテジウス批判である。山口は「マテジウスは自己の論文の中において『機能』や『機能的』という語をしばしば用いているが、『機能的』とはどういうことであるのかについて明確な定義を下している箇所は見当たらない」と指摘し、1940年の論文「音声学、その本質と発展」でマテジウスは「次のように述べているに過ぎない」と不満を漏らす<sup>(14)</sup>。山口が問題にするのは、「機能的観点の適用によって、音声学が人間のことばの中に認めることのできる全ての音声的要素が、必ずしも機能的に重要なのではないという認識に到達した」<sup>(15)</sup>という箇所なのだが、さらに追い打ちをかけるように説明の曖昧さを批判する。

この限りでは機能というのは、各々の要素が体系の中で持っているところの働き、という意味で

11 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,“ pp. 12-13.

12 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,“ p. 13.

13 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,“ p. 13.

14 山口巖『パロールの復権：ロシア・フォルマリズムからプラーク言語美学へ』ゆまに書房、1999年、85頁。

15 Vilém Mathesius, „Fonetika, její podstata a vývoj,“ in *Čeština a obecný jazykozpyt* (Prague: Melantrich, 1947), pp. 29-30.

あるような印象を受ける。[…] このような機能のとらえ方はコペンハーゲン学派では更に徹底しており、イェルムスレウの『言語理論序説』によれば「分析の条件を満たす依存関係」が機能ということになる。即ち、体系の要素は「機能を担うもの」であり、これらの要素間の関係が機能なのである。もしプラハ学派の言う「機能」がこれと同じようなものであるとするならば、何もプラハ学派を殊更に「機能的構造主義」として特徴づける必然性はないと思われる<sup>(16)</sup>。

機能を「働き」としながら、数学上の「関数」に近い要素間の相関というルイ・イェルムスレウ（1899-1965）の定義と差異がないとする山口の見解は、「プラハ学派の研究者たち自身、遅くとも戦後に起こったイェルムスレウの概念をめぐる議論までには、自分たちが機能という術語を言語の要素が実行する『課題』であるとか、それらの要素が奉仕する『目的』という意味で使っていたと明言するに至っていた」<sup>(17)</sup>とダネシュが指摘していることから、にわかには納得しがたい。しかし山口の批判の真意を探るには、プラハ言語学サークルの「テーゼ」第1条a項の「言語とは機能的なシステムであるとみる考え方」の中の次に引く一節が、「プラハ学派の機能的立場を極めて簡潔に、しかも核心を外すことなく表現したものであることが会得されよう」<sup>(18)</sup>と評されていることがヒントになる。

言語は、人間活動の所産である。したがって言語も、目的を志向するという特性を、人間の活動と共有する。言語活動<sup>ランゲージ</sup>を、表現行為として分析するにしろ、伝達として分析するにしろ、語る主体の意図が、もっとも容易に示せる説明で、しかも、もっとも自然な説明である。したがって、言語分析にあつては、機能に則して見るという観点をとるべきである。機能の観点から見るなら、言語とは、ある目的に適合せしめられた表現手段のシステムである<sup>(19)</sup>。

ヤコブソンが起草したといわれる「テーゼ」第1条a項における定義とマテジウスの「音声学、その本質と発展」の一節との相異がどこにあるかと言えば、語り手の意図と目的にはつきり言及しているか否か、別言すれば、目的論的な姿勢が鮮明か否かに尽きる。

ダネシュは「目的論」のような術語がマテジウスの著作には現れないと強調する一方で、同時期のヤコブソンの論文にはこの術語が頻出すると指摘し、「言語学における機能の概念が目的論という理論の大枠で扱われるようになるには、ヤコブソンによるところが大きかった」<sup>(20)</sup>と結論づけている。

こうしたヤコブソンの目的論的立場については、科学的認識にとって有効なものとして目的論的思考の復権を提起したカレル・エングリシュ（1880-1961）——マサリク大学の同僚でもあった経済学者のエングリシュ——の影響が大きいとされる<sup>(21)</sup>。出版当時、学界に大き

16 山口『パロールの復権』85頁。

17 Daneš, “On Prague School Functionalism in Linguistics,” p. 4.

18 山口『パロールの復権』87頁。

19 「テーゼ」351-352頁。

20 Daneš, “On Prague School Functionalism in Linguistics,” p. 7.

21 Roman Jakobson, “La scuola linguistica di Praga,” in *Selected Writings II: Word and Language (The Hague: Mouton, 1971)*, pp. 539-546.

な議論を巻き起こした『科学的認識の一形式としての目的論』（1930）の論点は、美学者のオソルソビェによって次のように要約されている。

〔エングリシュによれば〕世界を説明しようとする時、我々は三つの認識形式のうちの一つを選ぶことができるのだという。第一は、因果律に従って結果から適切な原因へと遡る自然科学的な方法と形式。世界は「ただ単に存在する」所与の何かとして理解される。二つ目の認識形式は目的論的形式。こちらが説明するのは、単なる所与としての世界ではなく、目的なり願望が識別される世界、「意図的欲求の能力を有する者によって欲せられている世界」だ。[...] 科学的な見方の第三は規範的形式 [...]。したがって第一の領域は自然的必然性の領域、第二の領域は意図性の領域、第三の領域は規範的絶対的必然性の領域となる<sup>(22)</sup>。

ではマテジウスの影響源——目的論的思考の希薄な彼の機能論の影響源となったのは、何であったのか。ダネシュは、それが社会学者のデュルケームやパレート、人類学者のラドクリフ＝ブラウンやマリノフスキーだと推測する<sup>(23)</sup>。泉靖一によれば「デュルケームの発想は、明らか歴史主義および進化主義にたいする批判であり、この発想が機能主義への出発点」<sup>(24)</sup>であったし、「ここで機能主義というのは、文化や社会の現象を、その起源や発展の過程から理解するのではなく、生きてたがいに働きあっている機能の構造として描き出そうという立場」<sup>(25)</sup>なのだから、青年文法学派の歴史言語学に異を唱えたマテジウスが共感を覚えても不思議はない。ここでは、より厳密な機能の定義を試みたラドクリフ＝ブラウンの機能論を瞥見してみよう。

コミュニティの「社会的生命＝社会的生活」とは、ここでは社会構造が「機能していること」として定義される。犯罪の処罰とか葬儀などのような、あらゆる反復される行為の「機能」は「全体としての社会生活の中でそれが演じている役割」であり、したがって構造の継続性を維持するためにその行為が果たしている「貢献」である<sup>(26)</sup>。

ただ厳密な科学性に固執したラドクリフ＝ブラウンは、その形而上的なニュアンスの故に目的論に対しては警戒的であったことが、次の引用文にうかがえる。

デュルケームの定義は、社会制度の機能は社会制度と社会有機体の必要との間での一致であるという。この定義はもう少し練り上げなければならない。第一に曖昧さが起きそうなのでそれを避けるため、とりわけ目的論的な解釈の可能性を回避するために、私としては「必要」という語を「存

22 Petr Osolobě, „Filozofická estetika a teleologie,“ *Universitas* 3 (2005), pp. 3-4.

23 Daneš, “On Prague School Functionalism in Linguistics,” p. 6.

24 泉靖一「マリノフスキーとレヴィ＝ストロース：人間の科学としての文化人類学」泉靖一（責任編集）『マリノフスキー レヴィ＝ストロース』中央公論社、1980年、15-16頁。

25 泉靖一「マリノフスキーとレヴィ＝ストロース」15頁。

26 Alfred Reginald Radcliffe-Brown, *Structure and Function in Primitive Society: Essays and Addresses* (London : Cohen & West Ltd. 1971), p.180.

在の必要条件」という術語で置き換えたい<sup>(27)</sup>。

したがってラドクリフ＝ブラウンの機能論に「主体の意図」への言及はない。こうした潔癖とも言えるラドクリフ＝ブラウンの見解と比べると、マテジウスの機能論にあってはまだしも目的論的性格が見てとれる。冒頭で紹介した山口の批判について付言すれば、そこで取りあげられていたのは音論のレベルの言語現象であった超個人的レベルの社会的機能とは異なり、こと音声のレベルにおいて問題になるのは、無意識ないし下意識のレベルでの弁別的機能であり、その場合、話し手の意志はもちろん、目的論的性格も強くは感じられないであろう。

このように見てくると、マテジウスによって定式化された機能から伝達・表現手段へという方法論は、ダネシュに倣って「話し手の観点を考慮に入れる必要性と関連づけられ、機能主義の基本原則と見なされた」<sup>(28)</sup>と要約する方が適切だろう。

「言語学におけるプラハ学派の機能主義」においてダネシュは、目的論という理論的枠組の中で機能の概念がどのような位置を占めているかを、プラハ学派が頻用した術語を使いながらうまく説明する。例えば「表現の必要」という句は目的と手段との関係に対応する術語というふうに、目標論的に解釈できることが示されるのである。『言語学事典』の「言語学では多義的に用いられるこの機能という語は、プラハ学派では『課題』という意味で用いられ」<sup>(29)</sup>という一節に現れる「課題」もそうであろうし、同じ事典の項目「機能」の「言語は、伝達のための道具である。[...] 一般に、道具は、ある仕事をする役を果たすものであり、その役が機能である」<sup>(30)</sup>という記述に見いだされる「道具」、「役」も同様である。

そこでキーワードに着目しつつ、マテジウスの回想「プラハ言語学サークルの十年」(1936)の断章、「表現の要求からその要求を満足させる言語的手段へと向かう研究法の利点を、要するに機能から形式へと向かう方法、つまりは機能的な方法のもつ利点を私は認識するようになった」<sup>(31)</sup>を読むならば、マテジウスの機能言語学は、大枠においては目的論のパラダイムに属しているように思われる。同様に論文「体系的文法分析について」(1936)の中の「全人類に共通する表現および伝達の要求は、その上に言語ごとに異なる表現および伝達の手段を置くことのできる唯一の共通分母である」<sup>(32)</sup>という一節にも、表現および伝達の「要求」「手段」というキーワードが使用されているのではないか。

ただし、マテジウスに関する限り、これまで用いてきた「目的論 (teleology)」という術語は、合目的性を目的因という形而上的な概念から区別するために生物学者のコリン・ピッテンドリ (1918-1996) の提案した「目標論 (teleonomy)」で置き換えるべきであろう。ダネシュ

27 Radcliffe-Brown, *Structure and Function in Primitive Society*, p. 178.

28 Daneš, "On Prague School Functionalism in Linguistics," p. 9.

29 亀井ほか『言語学大事典：術語編』1153頁。

30 亀井ほか『言語学大事典：術語編』273頁。

31 Vilém Mathesius, „Deset let Pražského kroužku,“ in *Jazyk, kultura a slovesnost* (Prague: Odeon, 1982), p. 439.

32 Vilém Mathesius, „O soustavném rozboru gramatickém,“ in *Jazyk, kultura a slovesnost* (Prague: Odeon, 1982), p. 50.

は“teleology”と“teleonomy”を区別せず、ともに「目的論」の意味で用い、目的論志向の有無にマテジウスの機能主義とヤコブソンの機能主義の間に原理的差異を見ているが、意識的に働く心理的主体の存在を前提とする「目的志向的 (goal-intended)」と「目標趨向的 (goal-directed)」を区別して考えれば、マテジウスを筆頭に、言語・芸術論も含めてプラハ学派の機能観を概ね後者のパースペウティヴのもとにおさめることができるし、そう考える方が実態に即している<sup>(33)</sup>。後に見るように、目的論 (teleology) に固執するヤコブソンの機能観についてさえ妥当する可能性さえあるのだから。

だがその一方で、「体系的文法分析について」のマテジウスが、科学性を担保するものとして、因果論を容認している事実もまた、見落としてはならない。先に言及した三種の認識形式、すなわち因果的、有目的、法則論的形式の中から所与の現象の説明にとって有効なものを目的論の立場から——言ってみれば「メタ目的論的」に——選択すべきだとするエングリシュの立場に<sup>(34)</sup>、むしろ目的論の説明に固執するヤコブソンよりもマテジウスに近い。これは哲学的に考え抜いてそうなった訳ではなく、哲学に関心がなかったが故に、常識に従ったが故の研究態度であった。マテジウスにもっとも大きな影響を及ぼしたボードウアン・ド・クルトネについても言えることだが、二人はヤコブソンのように、目的論を因果関係に依拠する機械論と絶対的に対立するとは考えていなかった<sup>(35)</sup>。

理論一般に対してきわめて慎重だったマテジウスの関心もまた、常識の範囲に収まる言語現象に限られていた。といって言語の伝達機能だけを問題にした訳ではない。純粋に伝達機能を取り出すことも、マテジウスにとっては理論的抽象だったのだろう、伝達機能しか有さぬ科学的言説にしても自然な言説とは言い難いものと見なされた。言い換えれば、自然な言説には二つの基本機能——すなわち伝達機能と表現機能——が共存していると、マテジウスは考えていた<sup>(36)</sup>。しかし、そうした複数の機能への着目を、ヤコブソンの6機能モデルはもちろん、プラハ学派に影響を及ぼしたビューラーのオルガノン・モデルほどにも理論化しようという意欲が、マテジウスには欠けていた。「自然な状況、人間的な次元において事物を見、実践的応用の可能性に配慮した解釈に従うという生来の性向」<sup>(37)</sup>のゆえに、抽象的で壮大な理論の構築を望まなかったのである。

ビューラーの機能論を参考はしたというのが、マテジウスが依拠したのはヤコブソンに影響

33 Elmar Holenstein, *Roman Jakobson's Approach to Language : Phenomenological Structuralism* (Bloomington: Indiana University Press, 1976), p. 118.

34 Osolobě, „Filozofická estetika a teleologie,“ p. 4.

35 ヤコブソンの目的論に関しては、トゥルベツコイもまた慎重な態度を取っていた。それをはっきり示すのが、1927年1月12日付けの書簡である。「音声変化の発生を『目標』によって(目的論的に)説明することは、本質的に新しく重要なものを数多く開示することが出来るでしょうし、開示してくれるにちがひありません。しかしそれでも私は、目的論的な説明が『発生論的』説明を完全に放逐、無意味にするにちがひないとまでは思わないのです。言語の生においては、両方の要因が——体系の『理想的変容』へと向かう無意識の志向性と、そして体系に無秩序をもたらす『機械的原因』のために生まれる無目的な変化の両方が並行して作用しています。」Roman Jakobson, *Pis'ma i zametki N. S. Trubetskogo* (Moscow, 2004), p. 104.

36 Vilém Mathesius, „Několik slov o podstatě věty,“ in *Jazyk, kultura a slovesnost* (Prague: Odeon, 1982), p. 170.

37 Daneš, “On Prague School Functionalism in Linguistics,” p. 6.

を及ぼしたことで知られる3機能モデルではなく、まだ素描の段階の機能論であったという<sup>(38)</sup>。しかも、叙述(Darstellung)、動能(Appell)、主情(Ausdruck)の3機能モデルをそのまま受け入れたわけではなかった。「今日、発話の課題はまず伝達である」と、いかにも常識的な見解を示しつつ、その一方で「科学的言説のような極端な場合にのみ、ビューラーに同意して『叙述』を論じることのできるような、そんな純粋な形で伝達が現れるにすぎない」<sup>(39)</sup>と指摘する。結局、マテジウスが言語活動の基本的機能としたのは、主情機能と伝達機能の二つであり、しかも後者の機能にはビューラーのオルガノン・モデルに示された純粋な叙述以外に、命令などが——後年ヤコブソンが措定した6機能のうちの「働きかけ機能」に属する現象が——部分的に繰り返されていた。

しかし、マテジウスにとって、ビューラーよりも、ましてやデュルケームやラドクリフ＝ブラウンよりも大きな灵感源となったのはボードゥアン・ド・クルトネであった。<sup>(40)</sup>

ボードゥアン・ド・クルトネの言語学の著作に見られる溢れんばかりの豊かな思想では「…」機能という理念が顕著な役割を果たしている。ボードゥアンは、所与の言語の中で音声のもつ課題、その生理学的性質と同じではない課題を強調し、現代言語学の基礎に属する音素の概念を考案した<sup>(41)</sup>。

1869年頃に書かれた発表原稿「アウグスト・シュライヒャー」において、ボードゥアンはシュライヒャーに手厳しい批判を加えているが、そこには反進化論的、反青年文学派的な姿勢が明らかだ。とりわけ興味深いのは、言語は自然の有機体であるとの基本命題を論難した箇所である。ボードゥアンによれば「言語は有機体であるというドグマを熱愛した」というシュライヒャーは、「このドグマ故に自らの犯した途轍もない数の矛盾が「…」全く目に入らなかった。言語を有機体と同列に置いたかと思えば、別の機会にそれを人類の特徴だと言って、有機体の機能と同列に置いたりしたのである」<sup>(42)</sup>と、立論にみられる混同や矛盾を列挙した挙げ句に、次のように提案する。

もし「有機体」(すなわち一定の空間を占有し、栄養を摂取して繁殖する知覚可能な存在)という擬人的な語に替えて「有機体の機能」(すなわち諸機関の活動の結果)とすれば、全ての矛盾が解決するという事実を指摘するにとどめておこう。そうすれば「生存競争」や「自然選択」というカテゴリーにこじつけずとも、言語の発達が理解可能になるし、言語内部における形態の歴史に問題を限定できる<sup>(43)</sup>。

38 Daneš, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,“ p. 58.

39 Mathesius, „Několik slov o podstatě věty,“ p. 170.

40 亀井ほか『言語学大事典：術語編』1153頁。

41 Vilém Mathesius, „Kam jsme dospěli v jazykozpytu,“ in *Jazyk, kultura a slovesnost* (Prague: Odeon, 1982), p. 43.

42 Ivan Aleksandrovich Boduen de Kurtene, “Avgust Shleikher,” in *Izbrannye trudy po obshchemu iazykoznaniiu I*. V.P. Grigor’ev and A.A. Leont’ev, eds. (Moscow: Izdatel’stvo Akademii nauk SSSR, 1963), pp. 37-38.

43 Boduen de Kurtene, “Avgust Shleikher,” p. 38.

ここでもキーワードは「機能」だ。ボードウアンの反進化論的な基本姿勢も、共時研究に軸足を置いていたマテジウスの共感を呼んだにちがいない。青年文法学派については、マテジウスも「比較方法がここでは親縁性をもつ言語の間にのみ用いられた」と指摘し、「依然として孤立した言語事実のみが研究されていた。[...] 個々の言語現象を孤立させることは、言語において機能が有する重要な役割を理解することをも不可能にした」<sup>(44)</sup>と批判していた。同様の機能を重視する姿勢が、言語の歴史的発達に無関心で、歴史的系統関係を顧慮せずに諸言語の異同を研究する言語類型論の先駆者の一人であるヴェルヘルム・フォン・フンボルトに対する共感を呼び起こしたのであろう。

〔フンボルトは〕さまざまな言語を、その発生論的親縁性を考慮することなく純粋に分析的な観点から、さまざまな言語を比較対照した。言語の分析とは「働き (energeia)」を分析することであって、「もの (ergon)」を分析することではないという考えは、彼が言語において機能のもつ意味を理解するのを容易にした<sup>(45)</sup>。

## 2. ヤコブソンとトゥィニャーノフにおける機能の概念

すでに述べた通り、ロマン・ヤコブソンの起草とされる「第1回スラヴィスト会議提出のテーゼ」の第1条のa項「言語とは機能的なシステムである」とみる考え方<sup>ランガー・ジュ</sup>では、「言語も、目的を志向するという特性を、人間の活動と共有する。言語活動を、表現行為として分析するにしろ、伝達として分析するにしろ、語る主体の意図が、もっとも容易に示せる説明で、しかも、もっとも自然な説明である」<sup>(46)</sup>というふうに目的論的 (teleological) な性格が明白であった。個人としてもヤコブソンは、「テーゼ」以前から反機械論としての目的論的姿勢を明確に打ち出していた。たとえば1927年初頭にプラハ言語学サークルで行った報告は「音法則と目的論的基準」と題し、青年文法学派の「音韻法則に例外なし」という機械論的原理にとって代わるべき目的論的見地が、「伝統的な説の見直しは、言語（とりわけ音体系）はその体系が奉仕する目的を考慮せずには分析し得ないという事実の認識へとつながる」<sup>(47)</sup>というふうに主張していた。

この時期のヤコブソンは、プラハ言語学サークルのメンバーとして活躍するかたわら、フォルマリスタたちとの交流も継続しており、1928年には『新レフ』誌の12号にトゥィニャーノフとの連名で「文学および言語研究の諸問題」を発表している。「テーヤーテーゼ」と通称されるこの綱領は、ムカジヨフスキーとヤコブソンによって代表されるプラハ学派の構造美学にとってきわめて重要な意義を持ったとされる。例えば平井正は、28年のテーヤーテーゼと29年の「第1回スラヴィスト会議提出のテーゼ」が「大筋において同じであり、ロシア・

44 Mathesius, „Kam jsme dospěli v jazykozpytu,“ p. 40.

45 Mathesius, „Kam jsme dospěli v jazykozpytu,“ p. 41.

46 「テーゼ」351-352頁。

47 Roman Jakobson, “The Concept of the Sound Law and the Teleological Criterion,” in *Selected Writings I: Phonological Studies*, Second, Expanded Edition (The Hague: Mouton, 1971), p. 1.

フォルマリズムの成果が基礎になっていることは明らかである<sup>(48)</sup>と評した上で、「機能的構造分析」という術語を援用して自己の見解を敷衍している

ここでは通時面での文学系列と他の諸系列との間の関係、体系の体系の問題が焦点となっている。そして提起された問題を解くための方法として、「構造的法則」を明らかににすること、エヴォリューションの問題を「機能的角度」から検討することが挙げられ、機能的構造分析というまさしく構造主義的認識を志向している<sup>(49)</sup>。

「機能的角度」とは、テーヤーテーゼの第3条の「文学で利用される文学的素材あるいは非文学的な素材が学問的研究の軌道に引き入れられるのは、それが機能的観点から考察される場合に限る」<sup>(50)</sup>という箇所に見える「機能的観点」を指すのであろう。テーヤーテーゼの言う「機能的観点」とは、文学作品ないし文学一般において作品の素材を目的・目標に関する有効性という見地から分析する姿勢と理解されるが、『新レフ』での初出時には編集部による序が付されており、そこでも「古い学問の『なぜ』という問いに替わって前面に押し出されてくるのが『何のために』という問いだ（機能性の問題）」<sup>(51)</sup>と目的論的性格が強調されていた。

これら二つのテーゼが直系の流れに属すると、一般にも見なされているにもかかわらず、注目すべきことに、トゥイニャーノフは、「第1回スラヴィスト会議提出のテーゼ」と同じ年に出版された『擬古主義者と革新者』（1929）所収の論文「文学の進化について」で、ヤコブソンの機能の概念と目的論志向と真っ向から対立する機能観を打ち出している。表題にある「文学の進化」は「文学史」と一線を画するものとして提起された概念であるが、通時研究ではある。一方、初期ヤコブソンの業績の中でもっとも重要な論文と目されている「史的音韻論の諸原則」（1930）にも次のような箇所がある。これまでの引用文でも、ここでもヤコブソンは変わることなく「目的論（teleology）」にあたる術語を用いている。

我々がある言語推移を言語的共時態という脈絡の中で考察する時、我々はその言語推移を目的論的諸問題の領域に導入することになる。このことから必然的に帰結するのは、目的性という問題が一連の連続的推移、つまり通時言語学に適用されるということである<sup>(52)</sup>。

とすれば、テーヤーテーゼの共著者ふたりの言語・文学の通時的研究にみられるスタンスの相違が気にならずにはいない。まずは、ヤコブソンの回顧的な文章「言語の手段＝目的モ

48 平井正「ヤン・ムカジョフスキーの構造美学」ヤン・ムカジョフスキー（平井正・千野栄一訳）『チェコ構造美学論集：美的機能の芸術社会学』せりか書房、1975年、231頁。

49 平井「ヤン・ムカジョフスキーの構造美学」231頁。

50 Iurii Tynianov and Roman Jakobson, "Problemy izucheniia literatury i iazyka," in Iurii Tynianov, *Poetika ; Istoriiia literatury ; Kino* (Moscow: Nauka, 1977), p. 282.

51 "Kommentarii," in Iurii Tynianov, *Poetika ; Istoriiia literatury ; Kino* (Moscow: Nauka, 1977), p. 530.

52 Roman Jakobson, "Principes de phonologie historique," in *Selected Writings I: Phonological Studies*, Second, Expanded Edition (The Hague: Mouton, 1971), p. 218.

デルに向けられた両大戦間のヨーロッパ言語学の活動」(1962)の一節を読んでほしい。

「機能的構造的分析」というレッテルをこの概観で避けるとすれば、それはこの数十年の間に「構造」と「機能 (function)」という語が言語科学においてもっとも曖昧な決まり文句になったからというに過ぎない。とりわけ“function”という同音異義語——手段=目的の観点から見た「役割」「課題」という意味の“function”と数学における二つの変数の対応としての「関数」という意味の“function”——は、しばしば混同されており、ラランドの『哲学辞典』が的確に警告しているように、「今日の刊行物の数ページをほとんど理解不能にしている混乱の一因がここにある」<sup>(53)</sup>

ここでのヤコブソンの立場からすれば、機能とは役割・課題にほかならない<sup>(54)</sup>。しかし一方、トゥィニャーノフは機能の概念を「体系をなす文学作品に含まれている各要素の〔同一作品内の〕他の諸要素との、ひいては体系全体との相関を、私はその要素の構成的機能と呼ぶ」<sup>(55)</sup>と定義していた。さらに「文学の進化について」のトゥィニャーノフが、目的論志向とも一線を画していたことも、次の引用文から読みとれる。

ロシア語には「志向 (ustanovka)」という語がある。それはおおよそのところ「作者の創作意図」を意味する。しかし、「狙いは立派だが出来映えは芳しくない」こともままある。さらにつけ加えれば、作者の意図は酵素でしかない場合もあり得る。文学固有の素材を扱っていると、作者はその素材に従っていくうち、自らの意図からは離れてしまうことがある<sup>(56)</sup>。

しかし、トゥィニャーノフが「志向」を「創作意図」としてではなく「構成機能」の同義語として用いていることは、次の引用文の冒頭に読みとれる。ここでの反目的論的な姿勢はさらに鮮明だ。

構成的機能、すなわち作品内部における諸要素の相関関係は「作者の意図」を酵母に変えるだけだ。「創造の自由」なるものは、現実と反する楽観的なスローガンであり、「創造上の必然」に席を譲る。文学的機能、すなわち作品と文学的諸系列との相関関係が、事態を締めくくる。「志向」という語から「意図」という目的論的ニュアンスを排除しよう<sup>(57)</sup>。

トゥィニャーノフにとっては、意図としての「志向」に行為の主体が含意されていることがいかにも不都合であった。徹頭徹尾体系論に依拠し<sup>(58)</sup>、主体の含意すら峻拒するフォルマ

53 Roman Jakobson, “Efforts Towards a Means-Ends Model of Language in Interwar Continental Linguistics,” in *Selected Writings II: Word and Language* (The Hague: Mouton, 1971), p. 526.

54 しかし、ヤコブソンの機能論の代名詞となっている6機能モデルにおいては、むしろ関数主義へと接近していることについては、本稿最終節で述べる。

55 Iurii Tynianov, “O literaturnoi evoliutsii,” in *Arkhaisty i novatory* (Leningrad: Priboi, 1929), p. 282.

56 Tynianov, “O literaturnoi evoliutsii,” p. 40.

57 Tynianov, “O literaturnoi evoliutsii,” pp. 40-41.

58 「この基本問題を分析するためには、文学作品が体系をなし、文学も体系をなしていることを前

リストとしてのトゥィニャーノフは、体系の交替として文学の変化を説明するための理論装置を構想した結果、文学過程における心理的主体を超個人的、自己調節的な体系でもって代えようと試みたらしい。つまり文学の体系は、体系に内在する法則性にしがたって進化するがゆえに自己調整的な性質を示すが、この自己調整的な性質は心理的主体によって外部からもたらされるものではなく、文学の体系に内在する特質であると、トゥィニャーノフは考えるのである。だが法則性や自己調整的な性格は、それらの進化に目標趨向的 (goal-directed) な性格をもたらすが故に、トゥィニャーノフは反・目的論的 (teleological) 姿勢を強調せざるをえないのであろう。従ってシュトリーターのように「作者はその作品を通じて一定の意図を実現しようとして、その意図に合致する特定の機能をもつ要素ないし手法を要求する」<sup>(59)</sup> と「文学の進化について」を総括してしまっただけでは身も蓋もない。

ヤコブソンが慨嘆するように、“function” という同音異義語がしばしば混同されているのは事実だとしても、言語・文学研究における役目・課題としての“function” と相関関係・関数としての“function” が全く無関係ではないと、ギュンターは言う。

機能論的アプローチにおける相対論的姿勢と目的論的姿勢の相違は、絶対的な対立と見做すべきではない。トゥィニャーノフの理論にも、時として（たとえば連合的機能の理解のように）目標指向的な契機が顔をのぞかせることがある一方、実用的言語と詩的言語を区別する定義は、ある一定の相関性抜きには考えられない<sup>(60)</sup>。

そこで「文学の進化について」における「機能」の用法に、そうした実態を探ってみようと思う。

旧来の文学史の基本概念である「伝統」とは、あるシステムに属する一つないし複数の文学的要素を不当に抽象し——そのシステムの中で一定の「ポジション」を占め、一定の役割を演じている文学的要素を抽象化し——異なる体系に属し、異なる「役・ポジション (amplua)」を占めている諸要素と混同し、見かけの上で全一的に過ぎぬ系列へとまとめ上げたものである<sup>(61)</sup>。

引用文中の“amplua”なる語は、一般に俳優によって演じられる「役」を指すが、サッカーで使用された場合は「ポジション」と訳されることが多い。そしてサッカーにおいて、ピッチ内を移動し続ける「陣形＝システム」の中で選手が占める相対的な「位置」がその選手の「役」を規定していることは、周知のところである。実際、トゥィニャーノフも、先の引用文の次

---

提として同意しておく必要がある。この基本的な同意があってはじめて、多種多様な現象や系列が織りなすカオスを眺めるのではなく、それらの現象、系列を研究する文芸学を樹立することができる」(Tynianov 1929: 32)

59 Jurij Striedter, *Literary Structure, Evolution, and Value: Russian Formalism and Czech Structuralism Reconsidered*, Matthew Gurewitsch trans. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1989), p. 76.

60 Hans Günther, “Funktsiia,” *Russian Literature* XXI (1987), p. 62.

61 Tynianov, “O literaturnoi evoliutsii,” p. 31.

頁では、あるシステムの構成諸要素について、それらが「関連し合い」という表現と並んで「作用し合って」という表現が現れ、「同一の要素の果たす役割」というように、相関関係としての「機能」から役としての「機能」へとずれ込んで行くさまが見てとれる<sup>(62)</sup>。

このように一貫性を欠くとも見えるトゥィニャーノフの機能論と反目的論についてスタイナーは、ホーレンシュタインを引用しつつ次のように解説する。

このかなりかぎこちない方法でトゥィニャーノフが主張しようとした論点は、今日では「目的志向 (goal-intended)」と「目標趨向 (goal-directed)」性、すなわち「目的論 (teleology)」と「目標論 (teleonomy)」の区別によって理解可能だ。言語変化についてのヤコブソンの考え方を論じた際、ホーレンシュタインはこの区別を手際よく次のように要約している：「目的志向的な行動は意識的な理念、信念、願望、意図にもとづいている。これらは、ある特定の行動の原因として作用する」。これに対して、「ある過程が目的志向的な行為に見えながらも、そこに意識的に行動する主体が認識できない時、それは目標趨向的であると言われる」。ホーレンシュタインによれば、目標趨向的な——すなわち「目標論的 (teleonomic)」な——プロセスの本質的特徴は、その「方向性をそなえた相関 (directive correlation)」である。「あるプロセスは、それが他のプロセスの原因となるだけでなく、逆に自らの進路も他のプロセスによって左右されるような形で関連している場合、合目的的であると見なされる<sup>(63)</sup>。

ここでは、ダネシュの用例にも見られたように、しばしば同義語とされる“teleology”と“teleonomy”が、前者を古典的な「目的論」、後者を意識的に働く心理的主体の存在を前提としない「目標論」というふうに区別されている。この区別は、マテジウスにおける目的志向・目標趨向の有無を論じた際に述べたことだが、生物学者のピッテンドリの提起したものである。自然淘汰の概念によって目的論的世界観は根絶されたという考え方が一般的になっていた生物学において、敢えてダーウィン批判を試みるにあたってピッテンドリは「目標論」という概念を打ち出し、万物は神を究極目的として生成展開するとした古典的目的論や形而上学との繋がりを断とうとしたという。

ピッテンドリのこの提案をヤコブソンは歓迎したとホーレンシュタインは言うが<sup>(64)</sup>、「他の諸科学との関係における言語学」(1967)を読む限り、それは疑わしい。

「目標論 (téléonomie)」という語は、客観主義的な謙遜ゆえに「終極目標 (finalité)」という語を避けた方が良くと思うときに用い得る語である。しかしながら、あたかも生命ある存在は個体の保存、特に種の保存という目的を目指して構造化され、組織化され、条件づけられているかのように、全てが生起するのである<sup>(65)</sup>。

62 Tynianov, “O literaturnoi evolutsii,” p. 32.

63 Peter Steiner, *Russian Formalism: A Metapoetics* (Ithaca, N. Y. : Cornell University Press, 1986), p. 125.

64 Holenstein, *Roman Jakobson's Approach to Language*, p. 118.

65 Roman Jakobson, “Linguistics in Relation to Other Sciences,” in *Selected Writings II: Word and Language* (The Hague: Mouton, 1971), pp. 685-696.

とはいえ、「条件づけられて」と断言せず「条件づけられているかのように」と書いているのだから、それは体系の自己調整的機能を指しているようにも読めなくもない。言語変化の研究にあたって目的論観点に立つことを強く主張していたにもかかわらず、ヤコブソンが実際に未来の言語変化や文学の変化を予言したことはない。いみじくもダネシュが指摘したように、言語変化の目的論的解釈に可能なのは「すでに起こった変化を説明する——というよりはむしろ、多少なりともその変化の誘因についての可能な説明の一つを提起することに過ぎず、特定の言語変化やその効果を予言することはできないのである」<sup>(66)</sup>。実際、テーヤーテーゼでは、「文学（ないし言語）の歴史に内在する諸法則を発見すれば、文学（ないし言語）の体系の具体的な交替ひとつひとつを特徴づけることが可能になるが、進化の早さや、理論的に可能な進化の道筋が複数ある場合にどの道筋を選択するかまでは説明できない」<sup>(67)</sup>と留保条件がつけられていた。

マルティネは、「目的論」「目的性」「体系の調和への傾向」といった用語が多く言語学者たちのあいだに不満をひきおこしたと回顧し<sup>(68)</sup>、彼自身も「調和への傾向を語ることは、説明を目的論的に展開することである。[...] 言語、あるいはその言語をしゃべる人たちに、何か、美しい、規則的な表を作りやすくする方向に音素を選ばせる、神秘的な力などあるはずもない」<sup>(69)</sup>と手厳しくヤコブソンを批判している。しかし、実はこうした批判こそがヤコブソンの「目的論」の「目標論」的本質を陰画のように浮かび上がらせてくれもする。つまり、ヤコブソンが主張するのは、トゥィニャーノフが文学体系に見たのと同様、言語体系そのものが内的法則性を有する自己調整的な体系であるという見方であるに過ぎない。「テーゼ」第1条には「今日では、進化過程内の諸事実はその法則に従って連鎖をなすという考え方 (nomogenesis)」<sup>(70)</sup>とあるが、“nomogenesis”とは、機械的「自然選択」を否定する生物学者ベルクが提起した規則性に基づく——同一の環境にある生物は、魚と鯨のように種の相違にもかかわらず類似した形態変化を遂げるという——「定向進化説」とでも訳すべき考え方を指しており、この進化説に意図する主体など存在しない。

トゥルベツコイによって提唱された「言語連合」の概念についても、言語接触による相互影響の結果というよりも、それらの言語が共有する志向性の顕現と見なしていたことに、西欧の言語学者たちは形而上的な目的論の匂いを嗅ぎつけ、批判した。しかし、言語に調和へと向かっているかのような様相を呈する事実が存在することは、実はマルティネも認めていた<sup>(71)</sup>。次に引く一節において“teleonomy”という語は古典的な目的論を指しているが、ヤコブソンが目的論的説明を試みた現象が実は古典的目的論の枠外にあることを、この引用文は説得力をもって示している。

目的論的 (teleonomic) な観察は、意図された (intended) ——あるいは目標指向的 (goal-striving)

66 Daneš, “On Prague School Functionalism in Linguistics,” p. 28.

67 Tynianov and Jakobson, “Problemy izucheniia literatury i iazyka,” p. 283.

68 ジョルジュ・ムーナン（佐藤信夫訳）『二十世紀の言語学』白水社、1974年、126頁。

69 アンドレ・マルティネ（渡瀬嘉朗訳）『共時言語学』白水社、1977年、71頁。

70 「テーゼ」354頁。

71 マルティネ『共時言語学』70頁。

な——効果だけを考慮に入れるのであって、意図の主体 (subject of intention) から見て、意図された目的 (intended purpose) とは無関係と思われる効果は考慮しないのである。ヤコブソンとヴァヘクが、体系に新たな均衡をもたらす治癒的変化の「意図されない偶発的效果 (unintended, incidental effects of the therapeutic change)」について語る時、二人はいま述べたタイプの現象に言及しているのである。このことから、目的論的 (teleonomic) な説明は因果論的説明の等価物を提供できない。そしてその逆もまた真である<sup>(72)</sup>。

つまるところ、ヤコブソン自身の主張する「目的志向性」と目的論と無関係に見えるマテジウスの機能観に読みとれる目標趣向的傾向との距離は、ダネシュが「原理的差異」と規定するほど大きなものではないように思われるのである。

### 3. ボガトウィリョフの民族誌における多機能性

次に民族誌学者のピョートル・ボガトウィリョフにおける機能の概念の検討に移ろう。彼の論考に機能なる用語が目立つようになるのは1920年代末から——すなわちプラハ学派の「テーゼ」(1929)が発表された前後からである。構造民族学の確立者と評されることもあるボガトウィリョフだが、こと機能主義的人類学に関する限り、20年代前半にはすでに英国の二人の人類学者マリノフスキーとラドクリフ・ブラウンによって創始されていた。1948年2月のソ連アカデミー民族誌研究所の公開会議においてボガトウィリョフが批判された際の罪状は、「同時代のブルジョワ的な学派のうちでももっとも反動的で活発なマリノフスキーの機能主義学派と関わりを持っているから」<sup>(73)</sup> というものであったが、それは当局のでっち上げた「冤罪」であり、ボガトウィリョフをマリノフスキーのエピゴーネンと見なす根拠など何も無かった。

既述の通り、ボガトウィリョフはヤコブソンと学生時代から親交があり、彼に仕事を世話してプラハに呼び寄せ、言語学サークルに誘ったのはヤコブソンであった。こうした人脈から考えても、「テーゼ」と同時期に機能への言及が現れる事実からしても、ボガトウィリョフにおける機能の概念は、彼の専門分野に近い文化人類学からではなく、プラハ学派の機能主義に由来することは間違いない。

話は前後するが、文化人類学に先駆けて機能主義という用語が定着したのは建築学の分野であった。建築家で家具デザイナーのカレル・ホンズィーク (1900-1966) の評論集のための序文でムカジョフスキーが述べているように、「建築的機能主義は、そもそもの機能主義的思考の原初に生まれたのであり、その先駆者であり預言者だった」<sup>(74)</sup>。そこから人文諸科学

72 Daneš, "On Prague School Functionalism in Linguistics," p. 28.

73 Henrik Baran, "O P. G. Bogatyreve: Po materialam arkhiva R. O. Jakobosona," in L. P. Solntseva ed., *Petr Grigor'evich Bogatyrev: Vospominaniia, dokumenty, stat'i* (St. Petersburg: Aleteia, 2002), p. 138.

74 Jan Mukařovský, „Předmluva,“ in Karel Honzík, *Tvorba životního slohu: Stati o architektře a uživatelské tvorbě vůbec*, druhé vydání (Prague: Václav Petr, 1947), p. 10.

へと、まずは文化人類学に、続いて言語学へと——「言語を表現の道具と解する機能言語学」<sup>(75)</sup>へと——浸透していったのである。

このようにボガトウイリョフの民族誌学が、建築学でも人類学でもなく言語学から機能の概念を導入したことの意味は、決して小さくないように思われる。最初に自覚された潮流としての建築的機能主義が「鎧を着込んでいるかのように合目的性の中に自閉し […] 唯一の目的以外には奉仕できない」<sup>(76)</sup> 機械をモデルにした単一機能主義であったのに対し、「個々の言語的形成物を（たとえば口頭言語と文章語などを）、ある言語が表現の個々の部分的側面に関する当該言語の最適化の結果として理解する」<sup>(77)</sup> プラハの機能言語学には既に言語活動の多機能性という考え方が芽生えていたのだから。こうした多機能性への気づきを、言語学者たちにもまして生産的に展開したのが、ほかならぬボガトウイリョフだった。

論文集『民衆芸術理論の諸問題』（1971）に付された（ただし1969年という年記のある）序文によれば、数次にわたるフィールドワークの成果である『ポトカルパチア・ルーシの呪術行為、儀礼、俗信』（1929）では「一貫して共時的方法が援用されていた。 […] 民衆の慣習、儀礼、呪術行為の共時的研究は、これらの民族誌的事実が、その形式と機能の絶えざる変化と私たちは向き合うことになることを示してくれた。多くの事例において、呪術行為や儀礼などが同じものでありながら、機能を変化させている様を私たちは目の当たりにした」<sup>(78)</sup> という。巻頭の「著者より」にも、1929年の冊子について「これらの民族誌的事実の形式と機能の両面の変化が明らかになると同時に、そこに現前する呪術的機能のアクチュアリティに応じて儀礼を分類し、動機づけられた呪術的行為が動機づけを欠いた儀礼に移行する際、いかにして美的機能がドミナントになっていくかを跡づけることができた」<sup>(79)</sup> と述べられているが、この事実について桑野隆は「ここでは後年の回想のせいもあって『機能』ということばが使われているが、この本では実際にはまだ機能は前面に出ていない」<sup>(80)</sup> と評する。しかし、同じ29年に発表された「民族誌地理学の問題に寄せて」では、すでに「共時的研究とは、ソーシャル言語学において定義されている通り、時間の一つの断面で民族誌的事象を研究することである。この際に前景化してくるのが、所与の瞬間に所与の民族誌的事象が有する諸々の機能である」<sup>(81)</sup> と、「機能」への言及——しかも複数形の機能——が見いだされる。後段でも機能の多様性について当然のごとく語られ、しかも、それらの機能の担い手である事物ないし事象が、同一の共時的断面でも別の文化体系、異なる文化構造へと借用された場合、機能が変化する事実注目している。

75 Mukařovský, „Předmluva,“ p. 8.

76 Mukařovský, „Předmluva,“ p. 8.

77 Mukařovský, „Předmluva,“ pp. 8-9.

78 Petr Grigor'evich Bogatyrev, “Magicheskie deistviia, obriady i verovaniia Zakarpat'ia,” in *Voprosy teorii narodnogo iskusstva* (Moscow: Iskusstvo, 1971), p. 169.

79 Petr Grigor'evich Bogatyrev, “Ot avtora,” in *Voprosy teorii narodnogo iskusstva* (Moscow: Iskusstvo, 1971), p. 7.

80 桑野隆『民衆文化の記号学：先覚者ボガトウイリョフの仕事』東海大学出版会、1981年、17頁。

81 Petr Grigor'evich Bogatyrev, “K voprosu ob etnologicheskoi geografii,” in *Funktsional'no-struktural'noe izuchenie fol'klora* (Moscow: IMLI, 2006), p. 85.

民族誌地理学の方法によって、私たちは民族誌的事実の機能の変化について、一連の貴重な観察が可能になる。周知の通り、民族誌的に異なる地域の二つの文化が衝突する場合、人為的に民族衣裳が保持されることが——そればかりか、この衣裳のもつ古くからの諸機能に新たな諸機能が付加されることがある。その結果、衣裳は意識的な民族的特徴へと変化する<sup>(82)</sup>。

ボガトウィリョフの挙げる例は具体的に理解しやすい。その機能主義が成熟した段階で書かれた「民族誌学とフォークロア研究における機能構造的な方法と他の方法」(1935)の次の一節など、まことに説得力がある。

借用についての基本問題の一つが、借用された社会的事実のもつ機能が新しい環境に入って、借用元でその事実が持っていた機能と比較し、どう変わったかという問題である。一例を挙げよう。ロシアの都市部ではオーバーシューズは泥から靴を守るために履く。それが基本的な機能だから天気の良い日にオーバーシューズは履かない。しかし、そのオーバーシューズが田舎の村に入るや否や、その支配的な機能が変化した。傲慢のタネ、賞賛の対象という役目が支配的な機能になったのである。田舎では、オーバーシューズが、もっぱら祭日か好天の日に履かれるようになった<sup>(83)</sup>。

ここにも窺えるように、ボガトウィリョフは「機能」の概念を厳密に定義することはない。小論の冒頭で引用した山口巖のマテジウス批判は、マテジウス以上にボガトウィリョフに妥当するのかも知れない。研究方法にしても、たしかに共時的ではあるが、その関心は機能の記述よりは機能の変化にあるらしい。共時研究でありながら、隣接する文化の間での借用の結果起こる変化の法則へと向かうスタンスは、起源や系統より地縁を重んじるトゥルベツコイやヤコブソンの言語史観と（ひいてはユーラシア主義者でもあった二人の文化観と）無関係ではなさそうだが、目的論、合目的性といった問題意識については無関心に思える。

桑野は、プラハ言語学サークルの「テーゼ」からムカジヨフスキーによって起草された第3条c項の「詩作品は一つの機能的構造体であり、そのさまざまな要素は、全体との関係を離れては理解できない。客観的には同じ要素も、異なった構造においては、安全に異なった機能を持ちうるのである」<sup>(84)</sup>という箇所、さらにはヤコブソンの「ドミナント」(1935)から「詩作品は美的機能だけに限定されているのではなく、それに加えて他の多くの機能をもっている」<sup>(85)</sup>という箇所を引用した上で、「ボガトウィリョフはこうしたプラハ言語学サークルの考えを、言語学や文学研究ではなく、もっぱらフォークロア研究や民族誌学の分野で活かして

82 Bogatyrev, “K voprosu ob etnologicheskoi geografii,” pp. 89-90.

83 Petr Grigor'evich Bogatyrev, “Funktsional'no-struktural'nyi metod i drugie metody etnografii i fol'kloristiki,” M. V. Minetok, trans. in *Funktsional'no-struktural'noe izuchenie fol'klora* (Moscow: IMLI, 2006), p. 146.

84 「テーゼ」34頁。

85 Roman Jakobson, “The Dominant,” in *Selected Writings III: Poetry of Grammar and Grammar of Poetry*, Stephen Rudy, ed. (The Hague: Mouton Publishers, 1981), p. 752.

いった」<sup>(86)</sup>と総括する。しかし、すでに後期フォルマリズムで一般的になっていたドミナントの概念とは言い条、ヤコブソンの論文「ドミナント」と同じ1935年に発表された「民族誌学とフォークロア研究における機能構造主義的方法と他の方法」には、既述の通り、オーバーシューズが田舎の村に入るや、すぐにその<sup>ドミナント</sup>支配的な機能が変化し、自慢のタネという役目がドミナントになった事実が指摘されていた。そこでは、1932/33年に発表された以前の論文「東スロヴァキアのクリスマスツリー」<sup>(87)</sup>で分析した事例についても、次のように再解釈が加えられている。

私たちはこう反論されるにちがいない——ある機能を果たす事実が住民たちにとって必要だったから借用が起こったと説明しながら、その事実の借用にあたって、借用された事実のもつ機能が変化し、それを満たすために借用したはずの機能にもはや適応しなくなると強調するのはなぜなのかと。かつて私が取りあげたクリスマスツリーも、その一例であった。なぜなら、借用後に美的機能が呪術的機能へと変容したのだから。だが私たちはこの異論に対してこう答えることができる——借用する時点において、借用される物や事実はいくつかの機能をあわせて持っており、そのうちの一つないし複数の機能が<sup>ドミナント</sup>支配的になっているのだと。つまり、別の構造に入ると、諸々の機能がシャッフルされ、実はそれが目当てでその事実が借用されたはずの機能が、一時的に他の平面にずらされてしまうことがあり得るのだと<sup>(88)</sup>。

ヤコブソンが原理原則を語るにとどまっているのとは対照的に、ボガトウィリョフはドミナントの概念の有効性を具体的に例示してみせる。「<sup>ドミナント</sup>支配的な機能」と機能の概念とを組み合わせ使用したのは上記の例が初めてだというのが<sup>(89)</sup>、記号の多義性とも解釈できる事物の多機能性を無理なく説明するためにはドミナントの概念が不可欠であることが、クリスマスツリーの例から良く分かる。さらにモノグラフ「モラヴィア・スロヴァキアにおける衣裳の諸機能」(1937)<sup>(90)</sup>になると、ドミナントな機能だけでなく機能のヒエラルキーの変化——言い換えれば諸機能からなる構造に生じた変化——までもが記述されるようになる。

普段着から祝日の衣裳へ、さらに祝日の衣裳から、大きな祝日のときにのみ身につける儀式の衣裳へ、そして花婿花嫁の衣裳などのような儀礼の衣裳へといった移行を研究することによって、私たちは、このような移行に伴っていくつかの機能が次第に弱まっていくさまや、当初の諸機能が弱まるにつれ、以前はそれほど強くなかった他の機能の力が強さをいや増していくさま、そしてついには全く新しい機能が生まれてくるさまを究明することができる。

移行は次の順番で起こることが多い：普段着→祝日の衣裳→儀式の衣裳→儀礼の衣裳。

普段着は次のような機能をもっている（もっとも強い機能から列举する）。①実用的機能（衣裳

86 桑野『民衆文化の記号学』22頁。

87 Petr Grigor'evich Bogatyrev, "Rozhdestvennaia elka v Vostochnoi Slavskii," in *Voprosy teorii narodnogo iskusstva* (Moscow: Iskusstvo, 1971), pp. 387-392.

88 Bogatyrev, "Funktsional'no-struktural'nyi metod i drugie metody....," p. 148.

89 桑野『民衆文化の記号学』23頁。

90 モラヴィア・スロヴァキアとは、スロヴァキアと隣接するモラヴィア南東地域を指す。

は寒さ暑さから身を守ったり、労働条件に適合していたりしなければならない)、②社会的地位・階級を示す機能、③美的機能、④居住地域を示す機能。

祝日や儀式の衣裳では、機能は次のような順序で組み合わせるであろう。①祝日・儀式的機能、②美的機能、③儀式的機能、④民族・地域を示す機能、⑤階級を示す機能、⑥実用的機能<sup>(91)</sup>

それにしても第1回スラヴィスト会議提出のテーゼの第3条a項、b項はボガトウィリョフの共時的研究の核心を予言しているかのようだ。だが予言は予言に過ぎない。ボガトウィリョフの民族衣裳論を俟って、ようやく言語の多機能性というプラハ学派の一大特徴とされる原理(ある意味「お題目」とでも言えそうな命題)が、誰にも理解でき、誰からも異論の出ない形で例示されたのである。しかも、ボガトウィリョフの列挙は際限なく続くように見える。試みに「モラヴィア・スロヴァキアにおける衣裳の諸機能」に列挙されている機能を拾い上げてみると、15にもものぼるのである。

1) 美的機能 2) 呪術的機能 3) エロティックな機能 4) 実用的機能 5) 祝日的・儀式的機能 6) 儀式的機能 7) 社会的地位を示す機能 8) 階級を示す機能 9) 財産を示す機能 10) 民族を示す機能 12) 地域を示す機能 13) 年齢を示す機能 14) 既婚か未婚かを区別する機能 15) 未婚の母を示す機能<sup>(92)</sup>

ここには、言語活動の全機能を閉じ込めようとした有名な二つの機能モデルのような——すなわちビューラーのオルガノン・モデルやヤコブソンの6機能モデルのごとき——完結性への志向が全く見られない。ビューラーとヤコブソンのモデルが閉じた図式であるのに対し、ボガトウィリョフは開かれたリストを提示しているに過ぎない。彼がほとんど際限なく機能を列挙できた理由のひとつは、研究対象がフォークロアや民衆文化であったという事実にもよるのだろう。いみじくもムカジョフスキーは、後段で紹介する「他の諸機能の中で美的機能が占める位置」(1942)において次のように指摘している。

諸々の機能が——そこに美的機能が含まれているのはいうまでもないのだが——弁別しがたく絡み合い、各々の行為において幾つかの面では変化を蒙りながらも、緊密な束となって現れてくるような文化構成体が存在する [...]。たとえばフォークロア文化がそうで、ここでは美的機能が支配的な営為である芸術でさえ、他の営みと区別することができない<sup>(93)</sup>。

しかもボガトウィリョフが多くの機能が列挙できたのは——さらには、それらの機能が分かちがたくからみ合った束を、すなわち諸機能からなる構造をなしていることを説得的に示し得たのは——機能の概念が「相関関係」を意味するのではないのはもちろん、「役割・課題」

91 Petr Grigor'evich Bogatyrev, "Funktsii natsional'nogo kostiuma v Moravskoi Slovakkii," in *Voprosy teorii narodnogo iskusstva* (Moscow: Iskusstvo, 1971), pp. 307-308.

92 Bogatyrev, "Funktsii natsional'nogo kostiuma v Moravskoi Slovakkii," pp. 297-366.

93 Jan Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ in *Studie z estetiky* (Prague: Odeon, 1966), p. 67.

というよりもむしろ「意味・記号内容」と解釈できる事例が多いからかも知れない。たとえば「モラヴィア・スロヴァキアにおける衣裳の諸機能」には、「ヴォニツァと呼ばれる」つばの広い帽子の上の花束が「記号として二種類の機能を有している。花婿を意味する機能(儀礼的機能)と、新兵を意味する機能(社会的地位、階級を示す機能に近い機能)である」<sup>(94)</sup>といったふうな同語反復的な表現が見いだされるのである。

それにしても、ビューラーのオルガノン・モデルやヤコブソンの6機能モデルが、言語活動を対象としているからだとしても、理論的完結性と裏腹に、伝達機能と詩的機能以外の例が容易に思いつかず、たとえば詩的機能とメタ言語的機能の区別が必ずしも容易ではないのに比べ、ボガトウィリョフの挙げる具体例は実に分かりやすく腑に落ちる。プラハ学派がボードアンから引き継いだ言語活動の多機能性という見解は、ボガトウィリョフのフォークロア研究において初めて、その実践的有効性を十全に発揮し、目覚ましい成果を上げたと言える。それは、第二次大戦後になってムカジョフスキーが、次のように評価した通りなのである。

実際の生活において、人間が機能の(任務等の)担い手となるような場合、単一機能性は、人間を生理的、精神的に歪めるただただ有害な現象として立ち現れる。そこで人間の多面性と、その行為が向けられる物質的現実の具体的で際限のない多様性を考慮する必要性が前景化してくることになる。機能と人間のこうした結合と両者の構造的関係についての学問的認識が生まれてすでに久しい。その実例としては、「構造民族誌学概説」(1931)や「記号としての民族衣装：民族誌における機能的・構造的な概念」(1936)、『モラヴィア・スロヴァキアにおける民族衣装の機能』(1937)といったソ連の民族誌学者ボガトウィリョフの仕事が挙げることができるだろう<sup>(95)</sup>。

#### 4. ムカジョフスキーの構造美学における多機能性の概念

次に引用したばかりのヤン・ムカジョフスキー——ヤコブソンとならんでプラハ構造主義美学を代表するムカジョフスキー——における機能の概念を検討に付そう。

最初に取りあげる『詩の意味論』は、ムカジョフスキー初期の考え方を示す数少ない刊本であるが、そこでの言語機能観は1929年の「テーゼ」第1条ないし第3条をほぼそのままなぞっているだけのように見える。同書がもともと1929年から翌30年にかけての学年の講義ノートであるからには、それも当然かも知れない。そこには「テーゼ」第1条の起草者のヤコブソンに目立つ「意図」の概念が見られ、目的論的志向が鮮明である。

したがって詩の言語は特殊な機能の言語である。言語における機能とはいったい何か。我々が機能と呼ぶのは一定の意図に言語を適応させることであり、どんな場合にも話し手はその意図をもって、言語という記号からなる体系を用いるのである。もちろんそのような意図は詩的言語の中だけでなく、あらゆる言語的表出一般に与えられるのである<sup>(96)</sup>。

94 Bogatyrev, “Funktsii natsional'nogo kostiuma v Moravskoi Slovakkii,” p. 306.

95 Mukařovský, „Předmluva,” pp. 12-13.

96 Jan Mukařovský, *Básnická sémantika: univerzitní přednášky Praha – Bratislava*, Hana Mukařovská, Miloš Tomičík, and Miloš Prochák, eds. (Prague: Karolinum, 1995), p. 24.

「我々が機能と呼ぶのは一定の意図に言語を適応させること」という定義は、「テーゼ」第1条aの中の「言語活動を表現行為として分析するにしろ、コミュニケーションとして分析するにしろ、語る主体の意図が、もっとも容易に示せる説明で、しかも、もっとも自然な説明である。したがって、言語分析にあつては、機能に即しているという観点をとるべきである」<sup>(97)</sup>という箇所の要約にほかならず、「詩の言語は特殊な機能の言語である」という定義も、ロシア・フォルマリズムの詩的言語論に起源を有する「機能方言」ないし「機能的構成体」と読み替えることができる。

その一方で、フォルマリズムの二項モデルにおいて「詩的言語」に對置される「実用的言語」に関する記述も、「テーゼ」第3条において、伝達の機能を果たす言語活動をさらに日常の実践的言語活動と理論的な定式化の言語活動とに二分する方式を踏襲している。

もう一つの機能的差異は、たとえば実践的な言葉と理論的な言葉との間に存在する。「実践的なことば」とは、それを用いる際に言語外的な要素（身振りや状況）によって補足されることを当てにしているような類いの言葉であり、会話の言葉がその典型であるのに対し、「理論的なことば」は十全性と正確性を得んとし、この上なく完結した意味的総体を作り出さんとする場合の言葉である<sup>(98)</sup>。

ロシア・フォルマリズムにおいては、主題的・論理的つながりから解放された詩語として——もっぱら詩的機能に集中した自律的・自己充足的な詩語として——ロシア未来派の「ザウミ」が、その詩的言語論の基礎に据えられていた。こうした詩的か実用的かの二項対立から、伝達のための言語からより純粋な伝達をめざす理論的なことばを分離することで三項モデルに到達していたとは言え、あくまで純粋性が分類の基準になっており、初期アヴァンギャルド建築の単一機能主義に似かよった純粋志向がそこには見てとれる。一般に、こうしたアヴァンギャルド芸術論にも共通する純粋主義を最初に批判したのは、「ドミナント」(1935)におけるヤコブソンであったとされるが、そもそもマテジウスは当初より、「科学的言説のような極端な場合にのみ、純粋な形で伝達・閲説機能が現れるにすぎないと<sup>(99)</sup>、純粋志向に根ざす理論的抽象に疑問を呈していたし、論文「ドミナント」と同じ頃、はるかに説得的に具体例でもって機能の複数性の実態を示したのはボガトウィリョフであった。そしてその後、1930年代後半から40年代前半になって、ヤコブソン以上に理論的に整った説明をなしえたのが、30年代半ば頃からその機能観をかなり変化させたムカジョフスキーであった。

前節において、ムカジョフスキーがボガトウィリョフによる単一機能主義の超克を高く評価している断章を引いたが、その引用文には「状況は建築においても同様だ。多分ここでは、当初の機能主義を機能の複数性と多様性という方向で、人間と関連づけて徹底的に再考することの必要性が、たぶん他の分野よりも緊急である」<sup>(100)</sup>との一節が続いていた。ムカジョフ

97 「テーゼ」352頁。

98 Mukařovský, *Básnická sémantika*, p. 25.

99 Mathesius, „Několik slov o podstatě věty,“ p. 170.

100 Mukařovský, „Předmluva,“ p. 13.

スキーにあっては、建築的単一機能主義への疑念から記号活動の多機能性への気づきが生まれたらしい。そこでまずは、ムカジョフスキーにおける多機能性への気づきを、アヴァンギャルド系の雑誌『建築』*Stavba*に掲載された「建築における機能の問題に寄せて」(1937/38)に辿ってみたい。

建築における機能の問題は現代の思考や文化的創造や生活上の実践における機能の問題と不可分である。機能的観点は、その物質的リアリティを否定することなく事物を活動として理解することを可能にしてくれる。[...] 現代文化の基本的作業仮説として、機能の概念は内的に分化されつつ発達してきている<sup>(101)</sup>。

「機能の概念は内的に分化され」という箇所には、すでに機能の複数性が含意されている。後段においてムカジョフスキーは「建築とは多機能的製作物の典型例なのだ」<sup>(102)</sup>と、建築理論における単一機能主義を否定し、「機能的観点の開拓者たちがかつて考えたように [...] 個人と目的との間の——そこからの直接かつ必然的な結果として建物の形態と構成が生み出される目的と個人との間の——単純な関係だけではない」<sup>(103)</sup>と言葉を継ぐ。ムカジョフスキーによれば、建築は人間の身体的・精神的要求の総和と関係するのであり、身体面の要求以外にも「快適性」や「記念碑性」といった心理的要求に応える必要があるのだという<sup>(104)</sup>。その直後に続く「人間の全ての要求、全ての目的との間に建築がもつ潜在的関係は、建築的創造物の支配的機能の交代の可能性によっても（官公庁として宮殿を、大学として証券取引所を利用する例を参照せよ）」<sup>(105)</sup>という一節には、ボガトウイリョフが挙げたオーバーシューズの例に似た機能の変化についても言及されている。そうした機能の変化への気づきもまた、「事物は唯一の機能と分かちがたく運命的に結びついているわけではない。それどころか、諸々の機能からなる全一的複合体に奉仕しないような事物などほとんど存在しない」<sup>(106)</sup>という認識を前提としていた。しかし、「建築における機能の問題に寄せて」から読みとれる機能の複数性は、ビューラーやヤコブソンの機能モデルのように図式化されておらず、むしろボガトウイリョフの列挙に似ている。

1942年の秋に発表された「他の諸機能の中で美的機能の占める位置」になると、二種の弁別的特徴の組合せによる4機能モデルが提起される。ここでムカジョフスキーが依拠しているのは、美が人間活動にあってどのように顕現するかという観点であり、問題とされたのは「事物の静態的属性としての美ではなく、人間の行動のエネルギー(energeia)的要素としての美」、「美が人間活動の美以外の動機、目的と結び結ぶ関係」<sup>(107)</sup>であった。マテジウ

101 Jan Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ in *Studie z estetiky* (Prague: Odeon, 1966), p. 196.

102 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 198.

103 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 198.

104 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 198.

105 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 198.

106 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 196.

107 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ pp. 65-66.

スも言及した「エネルギー」というフンボルトの概念を援用し、美を動的なものに見なした上で「目的」を視野に入れた結果、当然ながら「基本的な方法論的前提として、美の概念に代わって機能の概念の登場」<sup>(108)</sup>というふうに、決定的な変化が生じている。

「建築における機能の問題に寄せて」においてすでに「人間の行動それぞれにはあらゆる機能が潜在している」<sup>(109)</sup>と喝破していたムカジョフスキーは、さらに主体と客体の対概念を機能論の中に導入し、多機能性の概念にとって主体という視点の重要性を強調する。ある行動が複数の機能を有するとは複数の目的に奉仕することであるとし、行動の主体を重視するというからには、ムカジョフスキーの多機能論の目的論傾向は明らかである。

機能は、客体に対し一面的に投影されるべきではない。まず、それらの機能の生きた源泉としての主体を考慮に入れる必要がある。諸機能を客体に投影している限り、そこに我々は唯一無二の機能だけを見る誘惑を常に経験する。[...]しかし、主体という観点から機能を眺めるや否や、何らかの形で作用を及ぼすため現実に向けられる人間の行動はどれも、それらの行動を遂行する人間自らも時として区別できない幾つかの目的に、同時かつ不可分に相応している<sup>(110)</sup>。

そこでムカジョフスキーは、主体の観点から見た機能とは何かと自問し、「主体が外界に対して自ら働きかけるための手段というふうに機能を理解する場合にのみ、我々はそれらの機能を歪めることなく、なおかつ現実に背馳せずに多機能的に考えることができると自答し、独自の人間学的な機能の定義を——機能とは主体が外界に働きかけるための手段であるという定義を——提示する<sup>(111)</sup>。

そこからさらに複数の機能の相互関係を示す類型論が提起されるが、機能の分類にあってもう一つ弁別の特徴として導入されるのが、「直接的機能／記号的機能」という対概念である。事物を利用するために自ら現実に対し直接働きかける（例えば、火をおこすために枝を折るような）場合が直接的機能である。一方、他の現実を媒介させて働きかける（例えば、敵の絵を突き刺すことで敵に害がおよぶのを期待するような）場合が記号的機能だ。後者のケースで仲介物として働く絵は一つの現実であるが、別の現実を代行するがゆえに敵という現実と対等な記号となりおおせていると<sup>(112)</sup>、ムカジョフスキーは言う。

このように二分された機能が、先述の「主体／客体」の対概念によってさらに下位区分されることで4機能モデルが出来上がる。そもそもムカジョフスキーの定義からして、機能なるものが人間による能動的な働きかけである以上、それは主体を出発点とし客体へと向かう。そしてここで先の直接機能を、さらに客体が前景化された機能と主体が前景化した機能に二分すると、現実に直接働きかけその変容を目指す機能のうち、客体が前景化されているのが「実用的諸機能」である。逆に主体が前景化されていると「理論的機能」として分類され、後者の機能においては、現実の変容ではなくありのままの現実を主体の意識に投影すること

108 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ p. 66.

109 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 198.

110 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ p. 68.

111 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ p. 69.

112 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ p. 69.

が目的になる<sup>(113)</sup>。

同様に記号的機能を主体／客体という特徴によってから分類すれば、先ほどの敵の絵の例では、客体の絵を刺すことで現実の客体に影響を及ぼすことを望んでおり、客体が前景化されている。記号自体も、それによって意味される現実の現象も共に客体であるこの記号的機能が象徴的機能と呼ばれ、主体が前景化した記号的機能は美的機能と呼ばれる<sup>(114)</sup>。

以上の手順で構築される機能体系は、水平軸の両極に主体と客体が区別され、垂直軸において直接的機能と記号的機能が区別された次のような図として示される。

	(客体志向)	(主体志向)
(直接的機能)	実用的諸機能	理論的機能
(記号的機能)	象徴的機能	美的機能

もちろんこうした杜撰とも言える図式には大いに異論の余地があるだろう。しかし、ムカジョフスキの4機能モデルに価値があるとすれば、それは具体的な分類の結果にではなく、彼のアプローチの原理的側面にあると思われる。ほとんど知る人のない機能モデルであるが、シュミットやギャンデルマンのような研究者はヤコブソンの機能モデルよりもむしろ重要視しているし、ハマンも「それは作品の社会的諸機能面の枠から人間学的なるものへの明白な転回として現れた」<sup>(115)</sup>と高く評価する。この4機能モデルについては、エピローグにおいてヤコブソンの6機能モデルとの比較において再論したい。

## 5. ポスト構造主義への第一歩としての「非意図性」

先に名を挙げたシュミットは、人間学的観点から基本諸機能の源泉としての複数の機能を持ちつつ統合されている主体というムカジョフスキの命題を受け入れつつも、他方においてムカジョフスキにさらなる大転回が起こった可能性についても、次のように示唆している。

チェコ構造主義文学理論についての出版物は、二段階モデルから出発するのが通例だが、その二段階を区別する基準と見なされるのが、ムカジョフスキのフォルマリズムからソシール言語学とフッサールの現象学への方向転換、30年代初頭に起こった転換である。[...] この二段階モデルの中に位置づけるのが難しい論者が「芸術における意図性と非意図性」だ。なぜなら、この論考で著者は、非記号の概念を——言い換えればオブジェの概念を——記号の概念と緊密に結びつけているのだから<sup>(116)</sup>。

113 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ pp. 69-70.

114 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ p. 70.

115 Aleš Haman, „Výbor prací německé bohemistiky o české literatuře (se zvláštním zřetelem k Pražské strukturalistické škole),“ in Herta Schmid, *Struktury a funkce: výbor ze studií 1989-2009*. Vladimír Čadský et al. trans. (Prague: Karolinum, 2011), p. 12.

116 Herta Schmid, *Struktury a funkce: výbor ze studií 1989-2009*, Vladimír Čadský et al. trns. (Prague:

ここに至ってムカジョフスキーが記号論と芸術社会学の否定に傾いていると、新たに提起された「非意図性」の概念が、芸術作品が記号でないこともありうるという考え方へと——オブジェとしての芸術作品という概念へと——傾斜していく分水嶺になったと、シュミットは主張するのである。すでに何度も引用した論文「建築における機能の問題に寄せて」には、「個人は […] 一般的なコンセンサスによって結びつけられてはいないような機能で物物を使用したり、あるいはたった一つの物物に多様な機能が詰め込まれているというよくある状況の下、通常の配列を逆転させたり、一般的なコンセンサスからすると当該の場合に<sup>ドミナント</sup>支配的な機能と見なされることの多い機能とは別の機能を<sup>ドミナント</sup>支配的にするなどして、この法則性から逸脱することができる」<sup>(117)</sup>と、物物と機能の一対一の対応を否定することによって多機能性への気づきが示されている反面、主体の意図を認めている目的論思考が読みとれる。

しかし、機能間の相互浸透や機能の変化を論じるうちに、ムカジョフスキーはヤコブソンの目的論の否定へと繋がる考え方へと半歩踏み出す。例えば、次の引用文では作者が美的作用を意図しながら作品が美的機能を果たさない場合があり得る可能性が指摘されている。

ある対象が美的作用を直接意図して作られ、その意図に則して形態も最適化されていたとしても、だからといって例えば時空間や環境の変化によってそれらの対象が美的機能の大部分を失うことなど、ましてや完全に失うことなどあり得ないなどということには必ずしもならない<sup>(118)</sup>。

さらに続けて「我々のとは異なる環境を起源とする製作物が我々には芸術作品に見えるからといって、当然、製作者本人が美的機能を意図していたとか、製作者にとっては少なくとも美的機能が明らかにドミナントな機能だったと考えるべきではない」<sup>(119)</sup>と、正反対のケースにも言及される。このように物物と単一の機能が一夫一婦的に結びついているわけではないことに気づき、そこから作者の意図と美的機能が必ずしも結びついている訳ではないという認識に至り、しかもそうした非目的論的な認識に基づきつつもなお、芸術記号という概念を温存しようとして——芸術記号論の脱構築ではなく再構築を図ろうとして——提起されたのが、「意図性／非意図性」の概念である。まずそれらがどのように定義されているかを、論文「芸術における意図性と非意図性」(1943)に見てみよう。

意図性——すなわち、作品内部で作用しており、個々の部分・要素の集合体に統一的意味を付与し、それら一つ一つに、他の全ての部分・要素との間にある一定の仕方で関係づけることによって、それらの部分・要素の間の対立と緊張を克服することを目指す力<sup>(120)</sup>。

---

Karolinum, 2011), p. 23.

117 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 196.

118 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 200.

119 Mukařovský, „K problému funkcí v architektuře,“ p. 197.

120 Jan Mukařovský, „Záměrnost a nezáměrnost v umění,“ in *Studie z estetiky* (Prague: Odeon, 1966), p. 93.

ムカジョフスキーは、記号の意味的統一を保証するエネルギー的な意図性の力のおかげで統一性を獲得した作品だけが芸術記号になると考える反面で、美的テキストの中に遠心力も——組織化を志向する求心的な力に対する抗力も——存在していることも見逃さない。つまり、ムカジョフスキーによれば、芸術作品には意味の統合を阻害する諸力が同時に作用しており、「作品の中でこの統一に抵抗するもの——作品の意味的統一を乱そうとするもの——は全て、受容者によって非意図的なものとして知覚される」<sup>(121)</sup> のだという。これが意図性の対概念である非意図性である。作品の構造的、意味的統一が作者の創作意図の結果として知覚される一方、統一体からはみ出る不安定な要素は非意図的で偶発的なもの、情報の流れの中のノイズとして受容される。ただそれは必ずしも芸術性を損なうものではない。たとえばロシア構成主義における「ファクトゥーラ」の概念のように、あるいは演劇における即興やハプニングのように、エントロピックな非意図性が美的機能の知覚を活性化してくれる場合も少なくない。

「芸術における意図性と非意図性」にあつては、作品中の何が非意図的なものかについての決定権を有する主体は、作者ではなく受容者、発信者ではなく受信者になっている。なぜなら、非意図性の知覚が可能になるのは、美的テキストの内的体系性を認知しようとする受容者側の積極的な努力が前提になっているからである。とすれば、意図性／非意図性の知覚は作者の意図とは関係ないということになる。

ムカジョフスキーは、受容者の側が、作者の当初の意図とは異なる方向に作品中の意図性を変化させてしまった事例を、芸術史から引用することは決して困難ではないと述べる反面、故意に未完のままにされた彫刻のように、意識的に作品中に持ち込まれる非意図性もありうる。しかし、たとえ作者の意図で持ち込まれた非意図性であろうとも、自然発生的な非意図性と同様、意味的統一の侵犯として観者に作用することには変わりはない<sup>(122)</sup>。しかし「意図性／非意図性」を決定する主体が受容者である以上、「意図性」が作品に統一性をもたらす求心的な力であったとしても、それは作者の意図とは無関係なはずだ。要するに意図性は、作者の意図のような目的志向的なものではなく目標趨向的な力なのである。

こうした「意図性／非意図性」の対概念にポスト構造主義の萌芽を見ようとする立場からすれば、ムカジョフスキーの構造美学にも目的論の反映を見るオソルソビエの見解には、部分的に同意することしかできない。「構造美学の基本にあるのは、芸術作品を様々な機能の総合という理解」<sup>(123)</sup> であるというのはその通りだろう。だが「それぞれの機能は、集団意識がもつ規範[...]からなる体系との関連で遂行される」というのは、30年代半ばまでのムカジョフスキー——機能論の基本原則として主体を打ち出す以前の、超個人的なコードに関心を集中していた時期のムカジョフスキーにしか当てはまらない。にもかかわらず「ムカジョフスキーの功績は、文学、美術、映画作品の構造の有目的な成り立ちを、我々が思いも知らない場所に——たとえばマーハの『阜月』における音の構成やネズヴァルの『絶対墓堀人夫』の

121 Mukařovský, „Záměrnost a nezáměrnost v umění,“ p.92.

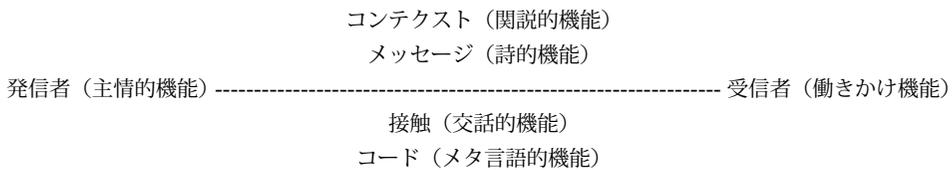
122 Mukařovský, „Záměrnost a nezáměrnost v umění,“ p.93.

123 Osolsobě, „Filozofická estetika a teleologie,“ p. 5.

換喩的構成に「[...]あるいは、チャップリンの演技の中に——見いだしたことにある」<sup>(124)</sup>と主張するオソルソビェは、意図性／非意図性の概念を歪めている。意識にのぼせにくい詩の音構成や、自動記述によるシュルレアリストの詩、チャップリンの即興的な演技が、実は意図されたものであり、目的志向性を有すると考えるのではなく、作者の意図とは無関係に受容者が意図性を認識する場合がある実例とすべきだろう。ムカジョフスキーは「芸術家がどのような手段を使って意図的に非意図的な印象を作り出すかも指摘している」<sup>(125)</sup>というのはその通りだとしても、我々の目に芸術作品に見えるからといって、美的機能を製作者本人が意図していたとは限らないとムカジョフスキーが考えていたことは、先ほど触れた通りだ。

### おわりに：ヤコブソンの6機能モデルのドミナンス

ここまでプラハ学派の機能の概念の多様性を辿ってきたが、実はその全ては（ヤコブソン自身の言説も含めて）、「言語学と詩学」（1960）において提起された6機能モデルにとって代われ、ほとんど顧みられなくなって久しい。ヤコブソンは、まず言語コミュニケーションに関与する要因として六つの要因（発信者／受信者／コンテキスト／メッセージ／接触／コード）を挙げ、そのうちのどれを志向するか、どの要因に焦点が合わせられるよって六つの言語機能を定義した。その結果が、彼のシンメトリーへの偏愛をうかがわせる次のモデルである<sup>(126)</sup>。



ヤコブソンのいう「志向性」なり「焦点」がどんなものか確かめるため、初めて6機能モデルの輪郭が示された「言語学の問題としてのメタ言語」（1954）に現れた用例を並べてみよう。「受信者に焦点が合わされた主情的もしくは表出的機能」<sup>(127)</sup>、「指示対象に対する志向性、コンテキストへの志向性が一手短にいえば関說的機能、外延的、知的機能が—多くのメッセージの主たる任務」<sup>(128)</sup>、「メッセージそのものへの志向性、そのことだけのためにメッセージに焦点を合わせることが詩的機能」<sup>(129)</sup>。

124 Osolsobě, „Filozofická estetika a teleologie,“ p. 5.

125 Osolsobě, „Filozofická estetika a teleologie,“ p. 5.

126 Roman Jakobson, “Linguistics and Poetics,” in *Selected Writings III: Poetry of Grammar and Grammar of Poetry*. Stephen Rudy, ed. (The Hague: Mouton Publishers, 1981), pp. 22, 27.

127 Roman Jakobson, “Metalanguage as a Linguistic Problem,” in *Selected Writings VII: Contributions to Comparative Mythology; Studies in Linguistics and Philology, 1972-1982*, Stephen Rudy, ed. (Berlin: Mouton Publishers, 1985), p. 114.

128 Jakobson, “Metalanguage as a Linguistic Problem,” p. 114.

129 Jakobson, “Metalanguage as a Linguistic Problem,” p. 115.

これらの定義をよく読んでみると、主情的機能や関說的機能では機能自体が志向性を持つかのように、詩的機能の場合でも、焦点をあわせるのは発信者でも受信者でもなく機能であるようにも解釈できる。いずれにしても、六つの機能は六つの因子との相関によって規定されており、長年ヤコブソンが主張してきた「課題・役」という理解からは遠い。最終的に定式化されたこの6機能モデルにあって、機能はむしろ「関数・相関性」へと接近している。だからこそ「明らかにヤコブソン・モデルに加えられてしかるべき批判は、それがダイナミックな図式ではないという異論であろう」<sup>(130)</sup>という否定的評価を招くのではないか。ギャンデルマンは批判をさらに続けて、次のように言う。

全体が機能する上での操作概念は「ドミナント」である。ヤコブソン・モデルのそれぞれの「極」は、ペアとなってお互い対立するなり「対話」することなどなく、安穏と肩を並べて共存している。たとえば関說的機能と詩的機能は（どちらかが他方に対し「<sup>ドミナント</sup>支配的」でありうるとしても）同じ一つの対象の内に平和裡に調和的に共存することができる。要するに、ヤコブソン・モデルは単に六つの機能の集合体に——各機能が完全に対等の資格と並存しているか、あるいは六つのうち四つないし五つの機能は「ドミナント」の背景をなす（ゲシュタルト心理学的な意味での）「<sup>じ</sup>地」として並列しているに過ぎないように見える<sup>(131)</sup>。

ここで弁証法的な思考法に依拠したムカジョフスキーの4機能モデルを想起するならば、それはいま見たヤコブソンのモデルよりも理論的整合性においては大いに劣るものの、動的なモデルには成りおおせているように思われる。実際、弁証法はムカジョフスキーの文学理論に一貫する原理であったことは、2015年に刊行された評伝<sup>(132)</sup>からも窺い知れる。ムカジョフスキーの美学の根底にあるのは、世界は対立に基づいているからこそ運動するのであり、研究対象となる種々の構造体も要素間の緊張、すなわち弁証法的対立によって有機的に組織化されている動的な全一体と——絶えず流動している動的、エネルギーの構成物と、動的プロセスと——見なしうるという命題であったというのが、評伝の著書スラーデクの見立てである<sup>(133)</sup>。

1937年の建築論では、特権的な機能とも言える美的機能が機能性の弁証法的否定であると語られる一方<sup>(134)</sup>、1942年の美的機能論は、記号的機能である象徴的機能と美的機能が常に潜在的に存在しているという事態が、象徴に付属して作用するエネルギーとしての対象指示的関係の潜在的可能性を意識させると同時に、記号が現実の何らかの具体的側面と結びついている訳ではないという意識（美的記号の自律性と自己目的性）を支えているといった風に<sup>(135)</sup>、つまりは語が道具として存在しうるには象徴としての語、美的記号としての語の存在

130 Claude Gandelman, „Dialektické fungování sémiotického modelu Jana Mukařovského,“ J. Žgáníčová, trans. in *Český strukturalismus v diskuzi*, Ondřej Sládek, ed. (Brno: Host, 2014), p. 201.

131 Gandelman, „Dialektické fungování sémiotického modelu Jana Mukařovského,“ p. 201.

132 Ondřej Sládek, *Jan Mukařovský: život a dílo* (Brno: Host, 2015).

133 Sládek, *Jan Mukařovský*, p. 253.

134 Mukařovský, „K problému funkce v architektuře,“ p. 200.

135 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ p. 72.

が不可欠だといったように、弁証法的な共存とでも言うべき実態が語られる。

既述の通り、ムカジョフスキーの機能モデルは、直接的／記号的と主体／客体という二組の特徴によって方形の図式が形作られている。当然ながら、四つの機能は水平軸と垂直軸の両方において差異化されると同時に相関してもいる。これはプラハ学派の音韻論でお馴染みの図式と言える。しかしムカジョフスキーは、さらに斜めの相関も可能ではないかと問う。つまりは実用的機能と美的機能の結びつき、理論的機能と象徴的機能の結びつきにも何らかの根拠はあるのかという問いである。

これら二つのペアの成員間の事実上の結びつきはきわめて多い：実用的機能が美的機能と結びつくことはひじょうに多いし、混淆することさえある（たとえば建築ないし演劇を参照せよ）。理論的機能と象徴的機能も全く同様である（たとえば、バロックの神秘哲学に命脈を保っていた象徴的意味と認識との共生を参照せよ）<sup>(136)</sup>。

矛盾する機能同士の弁証法的対立を想定する根拠は、実用的機能とその弁証法的否定であるはずの美的機能が、実際は結びつくことが多いという事実の観察に過ぎないが、しかし理論のために事実をないがしろにはしていない。ヤコブソンの6機能モデルは言語それ自体についてのモデルであったにもかかわらず、文学理論家や美学者はこの事実を等閑視し、このモデルが芸術テキストの機能モデルとして特化されていないにもかかわらず、何にでも適用可能な万能の図式として援用してきたのではないか。一方、ムカジョフスキーのモデルは限定的な有効性しか持たないものの、具体例を考察する際には有益なヒントを与えてくれることが多い。ただし、この4機能モデルも「非意図性」の概念の有する破壊的なインパクトは持ち得ていないこと、構造主義の限界を示しているのもまた事実である。

---

136 Mukařovský, „Místo estetické funkce mezi ostatními,“ p. 73.

## Prague School Functionalism in a Historical Context

OHIRA Yoichi

The “functional” attribute has been a characteristic feature of the Prague Linguistic Circle (PLC) since its inception. The term was chiefly recognized within the teleonomic frame of reference. The central members of the PLC featuring V. Mathesius, R. Jakobson, P. Bogatyrev, and J. Mukařovský were distinguished individuals with different academic interests and cultural backgrounds. While their conceptualizations of “function” accordingly reflect a great diversity of perspectives, specific differences among them can be identified on both the horizontal (between individuals) and vertical (the development of the opinions of individuals) axes. This article explores the roots and development of functionalism in the Prague school, addressing the various modes of its employment in linguistics, ethnography, and aesthetics.

The term “function(al)” is ubiquitous in the entire writings of the Prague scholars. For instance, the opening paragraph of the first chapter of the “Thèses” presented by the PLC to the First Congress of Slavists in 1929 is titled “Conception de la langue comme système fonctional,” and the title of Chapter 9 reads “Importance de la linguistique fonctionelle.” Furthermore, the corresponding Czech term “funkční lingvistika” appears as the title of one of Mathesius’s essays from 1929 that explores the “functional” principle through a discussion of the common requirement for expression and communication, and subsequently investigates the means to satisfy them. To ascertain the precise notional interpretation of this term is a complex task, however. The reasons for this difficulty are manifold. First, almost no scholarly attempt has been made to define “function,” a pivotal concept in the writings of the Prague school. Second, as the concept was applied to multiple domains such as linguistics, ethnography, poetics, and aesthetics, it has inevitably undergone various modifications. Finally, one can identify differences and vacillations in various authors’ interpretation of the concept of “function.”

The exploration of the usage of “function(al)” in the PLC writings requires an inquiry into the theoretical and philosophical background, as well as the inspiration that informs the systematic introduction of this concept into linguistic, ethnographic, and aesthetic debates. The dearth of direct references to relevant literature in prewar PLC writings confines our analysis to highlighting some possible influences from the works of Durkheim, Radcliffe-Brown, Engliš, Baudouin de Courtenay, and Tynjanov, among others. While J. Baudouin de Courtenay undoubtedly shaped Mathesius’s conceptualization of functionality, the latter was likely to be inspired by certain works of sociology, too. Jakobson, who arrived in Prague in 1920—several years before the formation of the PLC—was among central representatives of “Formalism” in Russia together with Tynjanov. With a teleological orientation in his writings of the Russian period, Jakobson was renowned for his detailed analysis of issues concerning Russian functional language, particularly his analysis of poetic language. Jakobson further developed the functional notion of “poetic language,” a characteristic feature of Russian Formalism, and incorporated it into his well-known six-function model. While Jakobson and Tynjanov coauthored a renowned thesis “Problems of Literary and Linguistic Studies,” Tynjanov’s mathematical model is in marked contrast to Jakobson’s conceptualization of “function.”

In his Prague period Jakobson extended his functional explanations to the treatment of language development, focusing mainly on the domain of phonology toward the end of the 1930s. In 1927 he gave a lecture titled “The concept of the sound law and the teleological principle,” in which he presented the notion of a goal-directed interpretation. Characterized as a “therapeutic change,” the essence of this idea was that a system of language is always striving to balance its elements. In his American-period works, Jakobson increasingly attempted to underpin teleological concepts with references to philosophical and scientific thought contemporary of that time.

Although Daneš underscores the diverging views on the notion of functionalism marked by Jakobson’s teleological and Mathesius’s common-sense approach, this divergence is actually less substantial than it may appear. Indeed, this divergence can be reconciled if we accept Pittendrigh’s suggestion that the new conception of finality be distinguished from the old, metaphysical idea of a final cause through the neologism “teleonomy.” As many functions of language (especially in the field of phonology) are unconscious, they cannot be simply understood with teleological (goal-intended) processes based on conscious ideas but must be explained as teleonomical (goal-directed) processes with no consciously acting, discernible actor.

Having arrived in Czechoslovakia in 1922 and become an active member of PLC, the Russian ethnographer P. Bogatyrev was the first to apply the functional-structural method to folklore study and account for the polyfunctionality of the ethnographic phenomena. In his Czech-period works, he discovered that various functions intersect with and interpenetrate into one another in folk culture.

The core concepts of PLC—structure, sign, and function—were also crucial elements of Mukařovský’s structural aesthetics. His structuralist period roughly lasted from 1928 to 1948, in which we can discern three stages reflecting a different accent on each of the three basic components of aesthetic interaction. While Mukařovský’s focus in his “Formalism” stage was primarily on the internal structure of artwork, by the mid-1930s he began to explore the set of norms valid for a particular collectivity. Then, at the beginning of the 1940s, his emphasis shifted from supra-individual codes to the subject’s role in the aesthetic process. Now Mukařovský described his conceptualization of aesthetics as “the study of the aesthetic function, its manifestations, and its vehicles.” Although this statement seems to make little difference from that of previous years, the third phase marked a sea change in his conceptualization of function in general and aesthetic function in particular: having originally treated function from the standpoint of the object, Mukařovský adopted the perspective of the subject. Finally, in his article “The place of the aesthetic function among the other functions” (1942), Mukařovský defined “function” as “the mode of a subject’s self-realization vis-à-vis the external world.” Positioning the subject as the source of all functionality, Mukařovský further advanced his thesis of the polyfunctionality of all artifacts, as he selected the deduction from the subject-object relation as an approach toward constructing his typology of functions. Thus, according to Mukařovský, all possible subject-object interactions could be subsumed under four main functions, namely, practical, theoretical, symbolic, and aesthetic. These functions are classified under two coordinates, the first of which relates to the type of subject-object relation—i.e., “immediate” vs “mediated (semiotic),” and the second refers to the hierarchy of subject and object in functional interaction.

Mukařovský's dynamic functional model related to the various functions operating in art objects was, however, completely superseded by Jakobson's six-component model encompassing the emotive, referential, poetic, phatic, metalinguistic, and conative dimensions. Literary and artistic theoreticians have treated Jakobson's scheme as a universally applicable set of functions, overlooking the fact that the latter was derived specifically from his linguistic pursuit. An obvious criticism that can be addressed against the Jakobsonian model is that his scheme is not dynamic, as its "poles" do not take shape with pairs either opposed to "dialoguing" with one another, or dialectically shifting combinations, but rather stay fixed coexisting side by side. In short, Jakobson's model is likely to be a manifold of six functions that simply coexist in juxtaposition, while four or five of the six serve as a "ground." In contrast, the model that Mukařovský developed in the 1940s is not closed nor static in nature but truly dialectical.